

走れ思い出

山線軌道

》4《

×7 貨物 第二
 五発電所までの工事の資材、人員を運び、その後、御料林からの木材、薪材、木炭など。昭和十一年の千歳鉱山操業からは大量の金鉱石を運んだ。昭和十二年頃の貨物輸送量は一年間で金鉱石七万二千ト、御料林産物一万五千ト、建築材料その他三万ト。

千歳鉱山の鉱石の運搬が盛んになると、山線にも多くの人が入って来ました。それで私は機関庫の仕事に移りました。早く機関士になりたいと思っていた私には、大きな喜びでした。

最初の仕事は掃除夫でした。機関車を油ポロで洗ったり、炭車に石炭を積み。夜動の時は朝の三時頃から枕木を割ってつくったたきつけと油を染みこませたポロでカマに火を入れ、蒸気をあげて、乗務員が出勤して来るまでに準備をしておきます。機関士は出勤すると機関車を整備して、なつて蒸

こう配に泣かされた機関助手

気をあげます。掃除夫から機関助手見習いになり、一、二週間くらいで機関助手になりました。カマをたく仕事ですが、山線はこう配線で支笏湖へ向かう上りはきつ／＼、カマ

した。それに山火事を防ぐのに煙突に網をかぶせてあったので、なお蒸気があがりません。

うまく蒸気があがると機関士も機嫌がいいし、私もハナ歌まじりです。でも、

蒸気あがればハナ歌まじり

たきの機関助手たちは泣かされました。こう配のきつい四マイルあたりでは、蒸気をいっばいにあげても上れない。石炭の質が悪かったり、煙管がゆるんで水がもれていたりすると大変で

そうしないと機関士はムスツと機嫌が悪く、意地の悪い人は狭い機関車の中で長々と足をのびしてすわり、その足がカマのたき口まで来てじゃまで仕方がない。若い私は、とうとう機関士

車について歩いて、機関士があやまるまで乗務しなかつたといつてもありません。古小牧市北光町二ノ六 吉田健言さん六三談



版画・能登正智さん(古小牧市糸井389-9)